

20世紀の旭川

20世紀初頭、1901年に大日本帝国陸軍第七師団が札幌から移動したことによって、旭川の町は急速に発展しました。約1万人の軍隊とともに、日本の他の地域からの移住者たちが到着し、軍事基地の支援産業、インフラ整備、サービス業に従事しました。

成長するコミュニティのニーズを満たすために、新興の醸造業が生まれ、1920年代までには約15の醸造所が地元で栽培された米から日本酒を生産するようになりました。家具製造業も、豊富な木材と当初は軍を支援するためにやってきた熟練大工たちによって急速に拡大し、著名な産業となりました。旭川は1922年に市となり、北海道の西海岸と東海岸を結ぶ鉄道路線、政府機関、学校を擁する北海道北部の中心地として繁栄しました。

しかし、第二次世界大戦は食料、資材、その他の必需品が戦争に向けられたため、市に深刻な影響を与えました。相次ぐ徴用で男性たちは農場から離れ、子どもたちさえも作物の世話をしなければなりませんでした。多くの住民は配給を補うため、空き地や公園で自家用の野菜を栽培しました。

1950年代の経済ブームは、日本の戦後復興のための農産物、建設資材、木材パルプ、家

具への需要増加により、旭川の活性化に貢献しました。現在、旭川は札幌に次ぐ北海道第二の人口を持つ都市となっています。